

ぼくらの時代

栗本 薫



ぼくらの時代^{じだい}

栗本 薫^{くりもと かほ}

© Kaoru Kurimoto 1980

昭和55年9月15日第1刷発行

昭和63年9月9日第25刷発行

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan



講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えします。(庫一)

ISBN4-06-136177-5 (0)



講談社文庫

ぼくらの時代

栗本 薫

講談社

目次

ぼくらの時代

解説

権田萬治
三四

五

ぼくらの時代

オープニング・シーン

このノートを書きはじめるまえに、云っておかなくちゃならないことがある。それは、ぼくがほんとはちつともこんなもの、書くつもりなんかなかった、っていうことなんだ。

大体ぼくがこんなもの書く理由もないんだよな。それを、けしかけて、お前が書くべきだ、と云った信とヤスヒコの奴、許せない。

「まあ、お前がいちばんヒマだしさ——オレらもう来年は社会人だからな。お前はそれに、前かわりと作詞なんかしてたじゃんか」

「作詞とこんなもんが一緒になるか」

ぼくはわめいたんだが、結局説得されてしまった。誰かが記録にしくちやいけない、って奴らは云うわけだ。

「やっぱひろく世間に、さ——見てもらって、知ってもらわなきゃだと思ふのよね。その上で、みんなに決めてもらわなきゃことだろ、どう思ふかは」

「ただまあ、真実をバラすと誰かさんに肅清されちゃうからさ——だから、小説にするわけヨ。」

これは小説です、フィクションです、作中人物にぜんぜんモデルはいません、つってさ」
「でも読めば、わかる奴にはわかつちまうよ」

「それは、いいんだ。云われたら小説だヨって云っておしとおしちまや、いいんだから」
何の、かんの、いわれて、やっぱりよくが押しつけられちゃった。でも本当はちっとも気が進まないんだからな。このノートが、万一、ああなつて、こうなつて、ぼくらの身の破滅になつたつてぼくの知ったことじゃないからな。

もうじき、お正月だ。正月休みには、信もヤスヒコも国に帰つちまう。しかたないからぼくひとり冷たい下宿でしこしことノートを埋めて、ひまつぶしにしていようかと思つてゐる。

だけど、これまで小説なんか書いたこともないから、ぼくにはどう書いていいのかもよくわからない。何からはじめればいいんだろう。自己紹介？

ぼく栗本薫。二十二歳、みずがめ座。某マンモス私大の三年生で、ロック・バンド『ポーの一族』のキーボードとボーカル担当。少し長髪、少し短足。まあ、その、カワイイ、と云つてくれる女の子もひとりふたりいたりして——いや、まてよ。これじゃ少女マンガだな。

まがりなりにも小説なんだからな。順をおつて、何とかであつた、つて書いていくのが、ホントなのかもしれない。こういう具合いかな。

『——TV局の白い建物の前に、少女たちが群らがつていた。

年のころは十二、三から、大きいので十七、八、というところだろう。

きれいな、あかぬけない、肥つたの、痩せこけたの、セーラー服にカバン姿、ジーンズ、ミニのワンピース、と恰好も態度も何の統一もなかったが、ただひとつの点では、彼女たちはみ

な似通っていた。

何かを待ちこがれているような、ぎらぎらと熱っぽい目つき。広い門からすべりこんで来るタクシーや自家用車が、局に出入りする客や局の関係者をおろすたびに、いっせいに首をまわして見では、また失望したように、玄関の方へ目をもどすこと、である。

「あい君、おそいなあ」

たまりかねたように、一人が云った』

うーん。こんな具合いだね。よし、決まった。じゃそれでいってみよう。それにしても、ほんとにどうなったって、ぼくは知らないんだからね。ぼくは要するに、ただの三流ピアノひきにすぎないんだからな。

1 ぼくらの発端

TV局の白い建物の前に、少女たちが群らがついていた。

年のころは十二、三から、大きいので十七、八、というところだろう。

きれいな、あかぬけないの、肥ったの、痩せこけたの、セーラー服にカバン姿、ジーンズ、ミニのワンピース、と恰好も態度も何の統一もなかったが、ただひとつの点では、彼女たちはみな似通っていた。

何かを待ちこがれているような、ぎらぎらと熱っぽい目つき。広い門からすべりこんで来るタクシーや自家用車が、局に出入りする客や局の関係者をおろすたびに、いっせいに首をまわして

見ては、また失望したように、玄関の方へ目をもどすこと、である。

「あい君、おそいなあ」

たまりかねたように、一人が云った。さっき、ガラスの扉から、客にまぎれて内部に侵入をくわだて、あっさり門衛につまみ出されていた、ふとった娘である。

ひつつめのお下げにした髪と、指のマニキュアがすぐわかない。そのような田舎くさは、多かれ少なかれ、そこに群れている三十人ばかりの娘たちのだれもが、どこかにのぞかせていた。真白な建物と、ガラスのドアから見える、螢光灯にてらされた超モダンなフロア、そこを行き来しているあかぬけた、いかにも誇らしげな人びとと、そろそろ日のくれてきた街を背景にいつまでも物欲しげに佇んでいる少女たちとは、まるで種族からして違っているようにさえ、見えた。

「どうしたの。たいそうな人だからじゃないか」

黒塗りのハイヤーからおりた、五十がらみの男が、出迎えた品のいい男に彼女たちを顎で示した。

「ああ、あれ。いつものことですよ。誰かのファンなんです。車からおりてスタジオ入りするところを、ひと目でいいから見て、あわよくばサインとか、握手ってね。要するに豚娘どもですがね」

「もう暗いのに、帰らんのかな」

「とんでもない、スタジオ入りを見るとこんどは帰るところを狙って、毎日毎日、十一時すぎまでうろついてまき。さすがに人数はだいぶ減りますがね。純情なもんというか、気狂い沙汰というか、まあ私らなんかは馴れっこになっちまってたいてい気がつきもしませんが」

「どういふ家の子なんだろうね。ああいうのが、キヤーとか、ワーとかやるわけだろう、ステージの下で。——誰を待ってるんだろうね」

「そうですね——」

彼はちよつと考えた。

「いまの時間なら、あい光彦か、関まきみでしょう。八時から『ドレミファ・ベストテン』の収録入ってますからね。あい光彦でしょう、きつと。このごろ急に人気が出てきましたからね」

「あい——ってあの、あいクンっていう、アタマにちりちりパーマかけて、気狂いみたいななりをしてる、男か女かわからんような——？」

「よくご存じですな」

「うちにも中三のがいるからね。部屋に写真なんかはっちまつて、はがせという喧嘩だ。私なんかもう年なんだろうね。どこがいいのかわからんし、あの頭、とっ捕まえてちよん切つてやりたいというとえらく怒つて、パパなんかと話はできないっていうからね。毎晩同じような歌番組ばかり見せられるし、まったくかなわん世の中だよ」

「ご時世ですよ。まあ私らなんかそのもとを作ってるんで、お得意様にこんなこと云えやしませんか、しかしどこがいいのかと思いますからねえ。まったく」

「おや、きみでもそんな風に思うかね」

「いやもう、私なんかまったく年で。——これで、三回に二回は、歌手なんぞ、あの連中をよけて裏からこっそり入っちゃうんで、今日あたりもう入ってるでしょう。待ち呆けと思や、可哀想な氣もしますけれども、しかし何ですなア、我々があのころには、ああいうむすめは、いな

かったですねえ」

二人は話しながら、エレベーターに入った。

エレベーターは玄関を入ってつきあたりに三基、並んでいる。ドアのしまる前に、ガラスのドアごしに、もうとつぷりと暮れてネオンのちらつきはじめている外に立ちつくす、むくむくとした少女たちの群像がシルエットになってかれらの目に入った。

「ああやって待って、ひと目見て、どうしようというんですかねえ」

TV局員はちよつと溜息まじりに云ったが、

「ところでこの企画なんですがね」

もう彼女たちのことは払いのけて向き直った。エレベーターが上昇してゆく、かるい浮揚感があり、ランプが次々に昇っていった、まもなく「七階」をつげた。

TV局の収録中のスタジオには、一種独特の熱気がみなぎっている。

そろそろ民放では少なくなりかけている、スタジオ制作の歌番組だった。この『ドレミファ・ベストテン』は数多いベストテン番組のはしりとして、しにせ極東テレビの売り物だったし、その中でもいちばん評判のいいのが、スタジオに入れたファンにボタンをおさせて、その支持率で決める「きょうのベストヒット」コーナーだったからである。

ひいきの歌手にベストヒットをとらせようと、ファンクラブや親衛隊の少女たちが、『ドレミファ・ベストテン』の整理券を奪いあいし、プレミアムまでついている、という評判だった。

「——はい、その赤いセーターの人、もっとつめて。いいですが、あまり押すとおっこちるよ」

トレーナーにジープンのアシスタント・ディレクターが手をメガホンにして指図している。伴奏のオーケストラの席はまだ半分がたあいていて、あちこちでチューニングに余念のない、いろいろな楽器の音が入りまじる。

ライトが順番にパツパツとついてゆき、またパツパツと消えてゆく。

「おい、あい君まだかア。何やってんだ、あのガキ」

「桜サン、ホリゾントのところへ来てくれませんか」

あちこちにのびているコードをかいぐぐって、スタッフがてんやわんやを演じている。

「じやいいですね。もう一度練習してみましよう。あいクン、階段の上に立つ。ボクが腕まわす。ワ。あいクンがおりてくる。ライトがあたる、ここで拍手やめ。最初ですからね。司会のことばにかぶさらないようにして下さい。特にあいクンのファンの人、キャッツというの、ボクが手あげるまでおさえてね。はい、もいっぺん。あいクン出た。江島健サンの紹介、おわる。はい、ワ」

A Dの腕に指揮されて、おとなしく、ひな段を埋めた若者たちは手を叩いた。

「はい結構。それ忘れないようにしてね」

「真野さーん、あいクンやつと来ましたあ」

「来た？ やれやれ、遅いぞ。早くメイク行つて。あといくらもないよ」

「F B Sから直行だつてさ」

顔をしかめて、若いA Dが云った。

「売れっ子にや勝てねエよ」

「あ——おい、こら」

席につこうとしたオーケストラのギター奏者が見とがめて怒鳴った。

「なんだお前、さわるな」

「すいません」

ひよいと首をさげてみせたのはぞろりと背の高い、とぼけた長髪の若者である。

「ギター見せてもらってたんですよ」

「アルバイトか？ 早く、あっち、行けよ。通れんじゃないか」

「どーも、どーも」

のっぽは、もて余してるみたいな長い脚を操ってカメラのうしろへ逃げこんだ。そこで、頭にアフロ・パーマをかけた中背痩せ型のと、ちよつと小柄で大きなパーカにくるまったのと、同じようなフーテンふうに何かぼそぼそ云って、三人でわあと笑ったので、ギター奏者が怒ってにらみつけた。

「せこいター、ギ、使ってやがら」

「金ねえんだろ」

ひな段の連中がそっちへちよつと首をまわした。しかし、

「ちよつとあいクンのカメラ・リハだけやりますから。そのあと十五分でランスルー、本番の順です。配置について下さい」

フロア・ディレクターの大声で、たちまちすべての目がそちらを向いた。

「あ、出てきた」

「あいつか。あい光彦」

例の三人組があげた声は、キャーッという少女たちの金切り声に消された。

「あいくーん」

「こっち、むいてえ」

「かわいいッ」

一段、高くなったステージに姿をみせたアイドル歌手は、大急ぎで着たらしい、シースルーのフリルつきブラウスに、ぴったりに黒のパンタロン、首に金のチョーカー、といういでたちだった。

ふたえ瞼、長い睫毛^{まつげ}、ちよつととがらせた唇、細い首と撫^なで肩、きゃしゃでフランス人形のような外見の少年だ。まだ十七、八で、デビューしてたちまち熱狂的な少女ファンの支持をうけてスターにのしあがっている。

「あいクンッ」

「好きーッ」

「ちよつと、ちよつと、ちよつと」

ADがわめいた。

「ちよつと時間ないんだよ。静かにして、静かに。うるさくするとつまみ出すよッ。あッ、こら、そこの子、どこ行くの、どこへ！ カメ・リハがはじまるんだよ。動いちゃだめッ、そこのロングヘアのコー！」

云われた方はしぶしぶもとの席におさまる。名指しで怒鳴られたのは、ひな段の上から二番目